

部活動について

加藤 一 朗

自分のことで恐縮であるが、寝起きまでも共にした団体生活の経験は二度ある。仙台の高等学校で剣道部の寮にくらしたのと、軍隊生活とである。前の場合では乳井という師範が激しい稽古をさせる方であつたので、苦しい日々の連続であつた。合宿があけて家にかえれる日を指折りかぞえてまった程であるが、この時の仲間は、苦勞を共にしただけになつかしい。もちろん現在もつきあっている。

軍隊生活の想出の中では、食料の缺乏していたマニラ時代に、私の属した班(分隊の半分)7人の間にとくに緊密な友情が生れた。いたるところにみられた、食料その他をうばいあうということもなく、一本の未熟のバナナを7等分して、粉味噌の汁にうかしてたべたようなこともある。しかしこのときの連中とは現在つきあっていない。実は戦後無事に復員したあとで、この時の仲間がなつかしくなり、新橋で家具商を営む家の息子君を誘ねた。しかしかれは、早くも戦時中のことは忘れてしまったかのようで、金でも借りに来たのかという顔をした。私は残りの5人を訪ねる元気を失った。

この2つの体験の相異を、自由な環境と強制された環境の下における団体生活の間の差異という風に私は解釈している。もちろんこの差は質的なものではなく量的なもので、結局自由の度合、強制の度合の相異ということになるであろう。とすると、戦争という極端な場合から私の文た拙い教訓も、探検のような団体生活にも何らかのいみをもっているとおもふ。

例えば、同じ訓練が、体力のさかんなA君にはむしろたのしみで、比較的体力のめざまれないB君にはむしろ苦痛であるといった場合もある。ある人には自由とおもわれるものが他の人には強制とおもわれるというような個人差というか個性の相違ということもあるであろう。そこで、私の部活動にのぞみたいことは各人の個性を尊重できるような自由な環境をいつまでも保存したいということである。もちろん団体生活には規律が必要であり、訓練はきびしくなければ、かえっていざというときに危険をもたらすとおもふ。にもかゝらず、私が自由とか個性の尊重とかいうのは、自由と規律との間に調和をもたせてほしいということ。

というよりも部員諸君が、自由と規律とを調和させる知恵を、実際の部活動から獲得してほしいということである。

このことは更に、探検ということに本来つきものの、2つの傾向、すなわち調査を主とするか探「険」を主とするかという2つの傾向の間の調和ということにも関係するとおもう。ある人々はより学術的な調査研究に重点をおきたいと考えるであろう。また他の人々は、訓練の成果を天下の嶺で絶えずためしたいと考えるであろう。この場合にも、私には2つの傾向がたゞ競争するのではなく、この2つの傾向の間に調和をもたせるということにたえず努力し、また両者を調和させる知恵をまなぶことが理想とおもわれる。

このような努力が探検部の場合最大のチームワークであるとおもうし、またわれわれ日本人はどちらかというところ、議論・競争して、相手をまかすことは得意であり、またこういうことに内心をもちやすいけれども、も一つの生き方、すなわち、意気のちがう相手との間に、互に努力して調和を見出し、より大きな目標に進んで行くということが下手のようにおもわれるからである。我田引水になるが世界歴史に徴してみても、「競争」はたしかに、種々の発展の原動力となりうるが、しかし同時に、ある社会、ある世界の内部で競争だけをくりかえして、そこに全体としての統一の力をおもわなかったものは必ず減んでいったのである。